

伝

■1995年1月17日（阪神淡路大震災）：午前5時46分。23年前、誰がこんな悲劇を予測できたでしょうか。突然襲い掛かった地震は、あっという間に6434名の尊い命を奪ってしまいました。亡くなった方の多くは家屋の下敷きになり燃え広がる火災による焼死がほとんどでした。目の前で家族を失う、これほど悲しいことはないでしょう。犠牲になった中学生は145人、小学生130人、赤ちゃんや幼児は、122人亡くなりました。■震災後、数日たった時の話です。遺体が置かれたある体育館では、残された家族で溢れかえっていました。その中で女の子が膝の前に置いた焼け焦げた鍋をじっと見つめています。泣くでもなく悲しむでもなく、ただ～じっと鍋を見続けています。世話をしている人が気になり声をかけます。鍋の中には小さな骨が入っていました。「どうしたの」と声をかけた瞬間、大粒の涙を流し、一生懸命に話し出します。その日は、お母さんに抱かれて1階の部屋で一緒に寝ていました。何が起きたのか分からないうちに家の下敷きになっていました。長い時間、身動きできずやっとの思いで脱出しますが、家の前は大騒ぎでした。どの家も倒れています。気が付くと火災が発生しており炎が近くまで迫ってきました。お母さんが家の中にいることを思い出だし、近くの大人たちに声をかけます。「お母さんを助けて、お願い助けて」繰り返し走り回っている大人たちにしがみつき助けを求めます。声がかかるまで叫び続けますが誰にも聞こえません。■もう自分で助けるしかないと決断し、「お母さん」と叫びながら倒れた家具をどけ、瓦を投げ必死に探します。やっとお母さんの手を見つけましたが、姿が分かりません。手を必死に握りながら叫びます。自分の手は、もう血でどろどろになっていました。女の子は、ただ「お母さん、お母さん」と泣きながら叫ぶことしか出来ません。叫び続ける女の子にお母さんは、名前を呼び、かすかな声で言います。「ありがとう。もう、逃げなさい。」そう言ってお母さんは、女の子の手を離しました。女の子は仕方なく逃げます。家を離れた瞬間、お母さんを下敷きにした家は燃えてしまいました。燃えていく家を女の子は何時までも見続けていたそうです。焼け跡から何日もかけて、お母さんを見つけ出し鍋に入れていたそうです。女の子は、事の有様を一生懸命に話してくれました。23年たった今、どうされているのでしょうか。犠牲になられた方たちは、どれほど無念なことだったか。私たちは、過去の教訓を学び未来に備えることが大切だと思います。ルミナリエの灯火は、トミナリエも受け継いでいます。謹んでご冥福をお祈りいたします。 2018.1.17